日本競馬の常識を覆した不屈の帝王

トウカイテイオー伝説

そして奇跡は生まれた

小川隆行
ウマフリ

3度の骨折を乗り越えて復活した

美しい流星と静かな瞳を持つ名馬の軌跡

トウカイテイオー伝説

日本競馬の常識を覆した不屈の帝王

小川隆行＋ウマフリ

星海社

264

SEIKAISHA SHINSHO

プロローグ

帝王の帰還、もしくは英雄の旅

オグリキャップのラストランとなった１９９０年の有馬記念を「伝説」と称するならば、その3年後の有馬記念のトウカイテイオーは「神話」である。

「伝説」とは、ある種の非日常的な体験が、多くの人に語り継がれていくことを指す。その意味で、オグリキャップの90年有馬記念は、「伝説」と言える。

現役最後の年の秋、ピークはもう過ぎた、終わった、燃え尽きたなどと思われていた「芦毛の怪物」が、武豊騎手の手綱に導かれて復活、大団円となった90年の有馬記念。第二次競馬ブームを巻き起こしたオグリキャップのラストランは多くの感動を呼び、そこから競馬の魅力に取り憑かれたファンは少なくなかった。90年の有馬記念と聞けば、多くのファンがそこに「あの」という枕詞を導くほどに、その走りは日本競馬の「伝説」になった。

翻(ひるがえ)って、「神話」とは何か。それを考えるときに、アメリカの比較神話学者であるジョーゼフ・キャンベルが語った、「神話」についての一節は示唆に富む。

「神話は、なにがあなたを幸福にするかは語ってくれません。しかし、あなたが自分の幸福

を追求したときにどんなことが起こるか、どんな障害にぶつかるか、は語ります」

いまこの瞬間を生きる我々に、「どう生きるべきか」を諭してくれるのが、「神話」だとするならば、93年の有馬記念は、キャンベルが語った意味での「神話」そのものと言える。

キャンベルはまた、世界各国の民族が持つ「神話」の中に、ある一つの決まった形があることを明らかにした。「旅立ち→通過儀礼→帰還」というその類型は、「英雄の旅」と呼ばれ、ジョージ・ルーカスが映画『スター・ウォーズ』の脚本の参考にしたことで知られる。トウカイテイオーの足跡は、日本競馬に授けられた「神話」の一つであり、またそれはキャンベルが示した「英雄の旅」そのものでもあった。

トウカイテイオーは、日本競馬史上において初の無敗三冠馬となった「皇帝」シンボリルドルフの血を引き、父と同じように無敗で皐月賞、日本ダービーを駆け抜けた。その牝系を見れば、古くは下総御料牧場の牝系に連なり、史上初めて牝馬で日本ダービーを制したヒサトモの血が流れている。

3歳（旧馬齢表記、以下同・現2歳）12月のデビュー当初から、その走りは洗練されていた。父と同じくサラブレッドの本質的な気高さと成熟した精神性を持ち、その容姿の美しさは、パドックを周回するだけで観る者を魅了した。柔らかで軽やかで、それでいて力強く伸びるフットワークは、サラブレッドの理想型のようにも見えた。それは、「皇帝」と称された父

と、その牝系から受け継いだ、高貴な血の結晶であったと言える。トウカイテイオーは、生まれながらにして「英雄」であり、その「旅立ち」は誰もが羨む輝かしいものだった。

しかし、日本ダービー制覇のわずか3日後に発覚した左後脚の骨折から、トウカイテイオーの「通過儀礼」は始まる。エリート街道を歩んできたその旅路は、それまでとは打って変わって、波乱や雌伏、困難、そしてドラマに満ちたものに変貌していく。

10ヶ月ぶりに復帰した産経大阪杯での圧勝。しかし、春の天皇賞ではメジロマックイーンの後塵を拝し、さらに再度の骨折が発覚。復帰した秋の天皇賞では、超ハイペースに巻き込まれて撃沈。それでも次走、ジャパンCでは海外の強豪たちを豪快に差し切った。そして暮れの有馬記念でメジロパーマーに逃げ切られての大敗、そのレース中に負傷。宝塚記念で復帰を期したが、その直前に三度目の骨折が判明し、失意の休養。

何度も何度もトウカイテイオーと陣営に繰り返される苦難は、そのまま我々が生きる中で起こる困難にも重なる。

「神話」とは、いまこの瞬間を生きる我々に、「どう生きるか」を諭してくれる、と先に述べた。トウカイテイオーが、度重なる苦難に何度も何度も立ち向かう姿は、私たちが歩くための道筋を照らしてくれる。無敗でクラシック二冠を制した実績ならば、常に種牡馬入りも選択肢に入る。しかし、トウカイテイオーとその陣営は、調整を続けた二風谷（にぶだに）を吹く風のなか

に、あるいは鹿児島の砂浜を照らす陽射しの中に、確証のない未来を信じ続けた。

我々は生きる中で、何度も困難にぶつかる。その度に人の縁に助けられ、メンターに導かれ、大切な存在に愛され、あるべき場所へと帰還する。そして、また新たな地へと旅立って行く。トウカイテイオーの旅路は、螺旋階段のように繰り返される「英雄の旅」そのものであり、それはまた、私たちが自らの生を全うするために重要なものを教えてくれる。

1年ぶりの出走となった、93年の有馬記念。最後の直線、ビワハヤヒデに馬体を併せて競り落とす姿は、かつて無敗でクラシック二冠を制した時代の優美さや完璧さというよりも、執念と泥臭さの入り混じった、不屈の魂とも言うべき鈍い光を放っていた。確かな熱を帯びたその光は、トウカイテイオーのもう一つの本質でもあり、それは私たちが困難や絶望から立ち上がろうとするときに、必ず芽生えるものでもある。

「色々なアクシデントがありましたからね…それを克服してね、本当に今までの中央競馬の常識を覆すね、本当に彼自身の勝利です。本当にすごい馬です」

騎乗した田原成貴騎手の勝利後のコメントが、トウカイテイオーの偉大さを物語っていた。

本書は、そんなトウカイテイオーの足跡について、語り尽くしたい。

トウカイテイオーが歩んできた、「英雄の旅」。それはきっと、あなたが真に自分自身の人生を歩むときに起こることを、あますところなく教えてくれる。

（大嵜直人）

引用：『神話の力』（ジョーゼフ・キャンベル＆ビル・モイヤーズ著、飛田茂雄訳、ハヤカワ・ノンフィクション文庫、2010年）より

1年ぶりの有馬記念を制覇。
三度の故障を克服した名馬のラスト伝説。

目次

プロローグ　帝王の帰還、もしくは英雄の旅　3

第一部　トウカイテイオーかく戦えり　12

［世紀の大一番］

日本ダービー　14

ジャパンカップ　20

有馬記念　26

名勝負ドキュメント1　「帝王」が日本競馬の常識を覆した！　32

特別インタビュー　競馬パーソナリティー・鈴木淑子さん　36

［新馬・オープン戦＆重賞レース］

3歳新馬　44

シクラメンステークス 46
若駒ステークス 48
若葉ステークス 50
皐月賞 52
産経大阪杯 56
天皇賞・春 5着 60

名勝負ドキュメント 2 最強の称号を懸けた「世紀の対決」 64

天皇賞・秋 7着 68
有馬記念 11着 72

第二部 同時代ライバルと一族の名馬たち 76

[同時代のライバルたち]
メジロマックイーン 78
ビワハヤヒデ 80
ナイスネイチャ 82
イブキマイカグラ 84
レオダーバン 86
メジロパーマー 88

ダイタクヘリオス 90
レガシーワールド 92
レッツゴーターキン 94
ライスシャワー 96
マチカネタンホイザ 98
イクノディクタス 100
ツインターボ 102
ホワイトストーン 104

［一族の名馬たち］
シンボリルドルフ 108
トウカイポイント 112
ヤマニンシュクル 114
ストロングブラッド 116

第三部 トウカイテイオーを語る 118
馬体 「ROUNDER」編集長／治郎丸敬之 120
血統 血統評論家／望田潤 124
気性・脚質・走法 元専門誌記者／和田章郎 128

第四部 トウカイテイオーの記憶 132
グッドルッキングホースは時代とともに 134

ダービー馬はダービー馬から!? 138
遙かなるダービー血統 142
ルドルフ&テイオー、ディープに共通する大記録 146
坂路のフロンティアとしてのテイオー 150
日本競馬・変革の時代 154
怪我から復活した名馬 158
サンデー前夜の種牡馬は花盛り 162
がんばれー クワイトファイン 166
最強の二冠馬はどの馬? 170
マンガ テイオー君とハヤヒデ君 174
座談会 あの頃はトウカイテイオーがいた! 176
トウカイテイオー年譜・生涯成績 184
おわりに 186
執筆者紹介 190

写真/フォトチェスナット、日刊スポーツ新聞社
産経新聞社

本書中の表記は2023年5月現在のものです。

第一部 トウカイテイオーかく戦えり

シンボリルドルフのダービー制覇から7年。父と同じ「無敗ダービー馬」の称号を手に。

世紀の大一番

栄光と挫折のドラマを繰り返し、
われらの時代に現れた特別な馬――
その蹄跡は奇跡へと続いていた！

第58回　1991年5月26日

日本ダービーGI

2着馬を3馬身突き放す楽勝劇 史上初の「8枠優勝」で無敗二冠馬に

1991年のダービーウイークは、ほとんどのスポーツ新聞がトウカイテイオーを取り上げていた。皐月賞を制して5戦無敗。「父シンボリルドルフと同じく無敗での二冠制覇」が確実視され、ファンの期待を一身に背負った。

当時競馬雑誌の編集を目指していた私も、競馬を好きになったシンボリルドルフの仔であるテイオーが勝つと信じて疑わなかったが、発表された枠順を目にして心が揺れた。

これまで優勝馬を出したことがない8枠を引いたのだ。

昭和の日本ダービーは毎年28頭前後が出走しており、最多は53年の33頭。6年前にシリウスシンボリが勝った際も26頭が出走していた。91年は20頭と、過去と比べて少なかったが、やはり大外は不利だと感じてならなかった。

父ルドルフは4枠10番から楽勝したが、テイオーの枠順は「父の倍」もある。

「最悪の枠だな」とコース適性を重視するNが言えば、「また大外か。これは勝つよ」とサイ

ン派のSは反論をする。当時はタカモト式などのサイン馬券が流行しており、「大レースで1番人気を大外に持ってくるのも、馬券を売りたいがためだ。これまで8枠馬が勝ったことはないからテイオーの単勝はお買い得だ」とSは付け加えた。

過去5戦、トウカイテイオーは2着馬を突き放していた。5番手前後を走りながら上がりは常に上位。上がりタイムが3位だった皐月賞でも2着に1馬身差をつけており、能力の違いは断然だった。ライバルと目された3歳王者のイブキマイカグラは骨折により出走を回避。テイオーを破りそうな強敵は見当たらなかった。

単勝オッズ1・6倍は、父シンボリルドルフの1・3倍に次ぐ高い支持率だった（テイオー以降はディープインパクト1・1倍、ナリタブライアン1・2倍、コントレイル1・4倍と3頭が上回っている）。

日本ダービーは「運のいい馬が勝つ」と言われているが、平成以降の優勝馬を見ると「もっとも強い馬が勝つ」レースに変わった気がする。出走頭数が昭和より10頭前後も減り、「ダービーポジション」（1コーナー10番手以内）という言葉は昔ほど言われなくなった。展開や位置取りによる不利は昔より減っている。

個人的見解だが、５００ｍ以上もある長い直線を走り切るスタミナ＝心肺能力がもっとも高い馬が勝つレースだと感じており、そのきっかけはこの年のトウカイテイオーだった。

「もっとも強い馬が勝つ」と感じさせてくれた最初の馬である。

レース前のパドックで目にした安田隆行騎手の顔つきから緊張感は感じられなかった。あくまで私感だが「普段と変わらぬ表情」であり、「テイオーがダービー馬になる」という予想はさらに深まった。

それまでローカルを主戦場としていた安田騎手は「小倉の安田」と称され、小倉開催45週連続勝利という記録も樹立したが、ＧⅠレースではほとんど目にしない存在だった。玄人好みとも言われるいぶし銀的な騎手がテイオーに出会ったことで自信が芽生えたのか、前年は自己最高の83勝をマーク。「僕を表舞台に連れて行ってくれたテイオーは、僕の人生のすべてだった」と述懐している。

大外からスタートし、ハナを切ったアフターミーから7馬身ほど後方に位置したテイオーは内ラチから3頭分ほど外目を回った。前半１０００ｍ通過61秒3と先行勢に有利な流れの中、4コーナー手前でピッチを上げ始めた。直線に入っても鞍上・安田騎手は手綱を持ったままで、残り４００ｍを切りムチを1、2発入れるとギアがトップに入り、テイオーは後続を突き放す一方。

2着レオダーバン（同年菊花賞馬）に3馬身差と、文字通りの圧勝劇だった。

勝つとは思っていたものの、想像以上の楽勝ぶりに驚かされ、しばらく言葉が出なかった。

3馬身差の楽勝。ゴール前でもムチを使ったが、そのムチはテイオーを走らせるより、安田騎手の嬉しさが表れたように感じた。1頭だけ別次元の勝ち方だった。

ダービーにおける2着との着差を見ると、最大着差はセントライトとオートキツの8馬身。筆者が目にした最大の楽勝はメリーナイスの6馬身差。後のディープインパクトやナリタブライアンは5馬身、テイオーの翌年の優勝馬だったミホノブルボンも4馬身と楽勝だったが、これらの一流馬に勝るとも劣らない内容であり、ゴール前は余力しか感じられなかった。

鞍上の安田騎手は「テイオーに勝たせてもらいました。ゴーサインを出して一緒に走ろうと伝えました」とレース後に語った。

前年のアイネスフウジン&中野栄治騎手のコンビと同じく、苦労を乗り越えて花が開いた騎手に対し、場内からは「安田コール」が起こった。

なお、日本ダービーで8枠馬が勝ったのはトウカイテイオーが史上初であり、最大頭数が18頭に定められた以降はナリタブライアン、サニーブライアン、ジャングルポケット、ワグネリアンの4頭が制している。また20番以降の馬番では、昭和30年以降で見ると77年ラッキールーラ（24番）、73年タケホープ（21番）に次ぐ優勝馬番だった。

内枠と比べて走行距離が増える大外枠からゲートを出て2着馬を3馬身も突き放す。数値や内容には示されない、テイオーの圧勝劇だった。

（小川隆行）

「1頭だけ別次元」――2着を突き放した豪快な勝利にファンは酔いしれた。

「本気で走っていたら何馬身差だったか」――余裕を感じる圧勝劇

大外からスタートしたテイオーは6番手＝絶好位をキープしながらレースを進めた。3コーナーを過ぎて緩やかに進出すると、4コーナーでは大外に持ち出して早くも3番手。他馬が懸命に追われる中、テイオーの手綱は緩んだまま。残り400mを過ぎてムチが数発入ると後続との差は広がる一方。ゴール前で手綱が緩むほどの楽勝劇は2着レオダーバンに3馬身差、文字通りの圧勝だった。

1991年5月26日

第58回 日本ダービー GI

東京　芝左　2400m　4歳オープン　晴　良

レース結果

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	8	20	トウカイテイオー	牡4	57	安田隆行	02:25.9		1
2	5	11	レオダーバン	牡4	57	岡部幸雄	02:26.4	3	2
3	5	13	イイデセゾン	牡4	57	柴田政人	02:26.6	1.1/4	4
4	5	12	コガネパワー	牡4	57	田原成貴	02:26.8	1.1/4	7
5	6	14	ソーエームテキ	牡4	57	的場均	02:26.8	ハナ	5
6	3	7	ワンモアライブ	牡4	57	角田晃一	02:27.1	1.3/4	13
7	7	17	タイコンチェルト	牡4	57	楠孝志	02:27.2	3/4	11
8	1	2	シャコーグレイド	牡4	57	蛯名正義	02:27.4	1.1/2	3
9	1	1	イイデシビア	牡4	57	田面木博公	02:27.5	1/2	15
10	7	18	ホクセイシプレー	牡4	57	須貝尚介	02:27.6	1/2	20
11	4	10	カミノスオード	牡4	57	田中勝春	02:27.7	1/2	9
12	6	15	イイデサターン	牡4	57	河内洋	02:27.9	1.1/2	12
13	4	9	ロングタックル	牡4	57	南井克巳	02:28.0	クビ	16
14	6	16	イブキノウンカイ	牡4	57	村本善之	02:28.3	2	8
15	4	8	ビッグファイト	牡4	57	小島太	02:28.4	クビ	14
16	2	4	セトホーライ	牡4	57	郷原洋行	02:28.6	1.1/2	10
17	7	19	ツルマルモチオー	牡4	57	石橋守	02:28.7	1/2	19
18	3	6	アフターミー	牡4	57	蓑田早人	02:29.3	3.1/2	18
19	3	5	シンホリスキー	牡4	57	武豊	02:30.0	4	6
20	2	3	レオサイレンス	牡4	57	増沢末夫	02:31.1	7	17

「帝王」が日本競馬の常識を覆した！

第38回 有馬記念 GⅠ

芝2500m
1993年12月26日(日)
中山9R

古馬と初対戦の旧4歳から7歳まで幅広い世代が集結。GⅠ馬8頭が出走の華やかな一戦に。

穴党も認めた1番人気ビワハヤヒデ。前走で菊花賞を制すなど勢いは断然、不安な要素は少なかった。

（レース展望）

クラシックホース5頭集結の豪華メンバー。菊花賞馬ビワハヤヒデとジャパンC優勝馬レガシーワールド＝GⅠ優勝直後の2頭に重い印が集まった。これに続くのはダービー馬ウイニングチケット。実績は断然だったトウカイテイオーだが、「1年ぶりでは…」「昨年は負けすぎ」との低評価から無印にする記者も多かった。

テイオーだ! テイオーが来た!

「ひるむな 沈むな」と叫びながら、
1年ぶりのトウカイテイオーが
目の前を突っ切って行った――

半馬身抜け出したテイオーの奇跡的な勝利。劇的な瞬間を目にした観客は誰も彼もがヒートアップ。これぞ競馬の醍醐味だった。

〈払い戻し〉

	馬　番	配　当	人　気
単　勝	4	940	4
複　勝	4	470	8
	13	140	1
	12	450	7
枠　連	3-8	960	4
馬　連	4-13	3290	11

4番人気となったテイオーの単勝は940円。対して複勝は470円。テイオーの復活を祈ったファンが多かった。

〈勝敗の分かれ目〉

連覇を狙った逃げ馬メジロパーマーが展開のカギ。前年はノーマークで逃げ残れたが、この年は有力馬からマークされる存在となり、後方各馬の仕掛けは早め。「有力馬が早めに動く」と予想した鞍上の田原成貴騎手は、好スタートから8番手に控え追い出しも遅め。「末脚に懸ける騎乗」が感動的なシーンの要因となった。

競馬パーソナリティー　鈴木淑子さん

いくつもの夢を叶えてくれた名馬トウカイテイオーの思い出

トウカイテイオーがデビューした頃と言えば、売り上げが右肩上がりで若いファンも増えるなど競馬界が盛り上がってきた真っ只中。私も競馬番組の企画やイベント司会などで騎手や関係者の方々にトウカイテイオーのお話を聞く機会がありました。いくつもの夢を叶えてくれた名馬トウカイテイオーは忘れられない名馬です。

１９８０年代の競馬場と言えば、雨が降ると黒や紺、茶色の傘と、男性ばかりの空間。それが、オグリキャップや武豊騎手、松永幹夫騎手というスターの登場により、女性ファンやカップル、さらには家族連れも見られるように。トウカイテイオーが登場したのは、ＪＲＡが長きにわたって目指していた「楽しさは一家そろって中央競馬」（競馬場備え付けの湯飲みにもそう書かれていました）という競馬の楽しみ方が広まっていった過渡期のことでした。

まだ東西の競馬が明確に分かれていた時代でもありましたが、評判は聞こえてくるもの。3歳（現2歳）王者の関東馬リンドシェーバーを破り関西馬イブキマイカグラが勝利した弥生賞の後も、関東のファンたちは「西にはもっとすごい馬がいるらしい…」「トウカイテイオーという馬がとんでもない強さらしい…」と、噂の超大物との対面を心待ちにしていました。

トウカイテイオーの関東初見参はその2週間後、中山競馬場での若葉S。メインでは重賞のダービー卿チャレンジTが開催される日でしたが、若葉Sの方が注目されていたような気がします。そしてパドックの時点で「なんだ、この繋（つなぎ）の柔らかさは!?」と衝撃が走ります。繋にバネがあり可動域が他馬と全く異なるため、周回する際に蹄が刻むリズムですら、「ぱこ、ぱこ…」という通常のものとは違う「ぱこーん、ぱこーん」という独特なものでした。

本馬場に入場し向正面まで流してからピタッと止まると、なんとトウカイテイオーが、私の担当するフジテレビ競馬中継のテレビカメラの場所がまるで分かっているかのように、カメラへ視線を送ってくれたのです。その姿に「この馬は天性のスターだ!」と驚嘆しました。美しい流星、風にたなびくフサフサの前髪…。まるで漫画『巨人の星』の花形満のような格好の良さ。この日初めて競馬を見た人から、オールドファン、競馬関係者まで、誰もが直感的に「カッコイイ〜」と思ったはずです。それほど、抜群の容姿をしていました。そして2馬身差の完勝。多くの競馬ファンの心をガッチリ摑み、皐月賞の本命に躍り出たのです。

トウカイテイオーは、日本ダービーまで実に強かった。残念ながら骨折により「無敗の三冠馬から無敗の三冠馬を」という願いは叶わなかったものの、史上初の「無敗のダービー馬から無敗のダービー馬誕生」という素晴らしいシーンを見せてくれました。今よりも内国産種牡馬が強い馬を出してくれることがファンの楽しみだった時代。それを、七冠馬シンボリルドルフが初年度産駒からこれほどの馬を出してくれるとは…。しかも、皐月賞の2着は、ミスターシービー産駒のシャコーグレイド。シンザン以来19年ぶりに誕生した三冠馬ミスターシービー、その翌年に続けて誕生した三冠馬シンボリルドルフ。奇跡のような時代を彩った2頭の三冠馬の産駒がワンツーというドラマに感激しました。

翌年休養明けの産経大阪杯では、鞍上がそれまでコンビを組んでいた安田隆行騎手が調教師を目指すため、岡部幸雄騎手にバトンタッチされます。そこで選ばれたのがシンボリルドルフとコンビを組んでいた岡部騎手というのも劇的だなと感じたものです。岡部騎手自身も、初めて追い切りに乗った時「地の果てまで走って行きそう…」と語ったように、この馬への思い入れは相当なものだったのではと思います。産経大阪杯を優勝し、見事に復活を遂げたものの、天皇賞（春）ではメジロマックイーンに敗れ、放牧明けの天皇賞（秋）でも7着。

もどかしい思いが続いただけに、ジャパンCでの復活劇はそれはもう衝撃的な喜びでした。岡部騎手も、おそらく自らの手で、シンボリルドルフの息子を復活勝利へと導き、初めてジャパン

C父仔制覇を果たせたうれしさがあったのではないでしょうか。大きなレースで勝利してもガッツポーズをせず馬の無事を最優先する冷静な岡部騎手が、豪州代表のナチュラリズムとの叩き合いを制してゴールすると同時にガッツポーズをされたのです。勝利した翌週にインタビューをした際には「あの歓声は今まで経験したことがないほどのもの。大きな壁が自分の方に押し寄せてくるような感じだった」と興奮気味に仰っていました。

ゴールの瞬間を前から見ると、ガッチリしているナチュラリズムに比べ、スラリとしてやや薄く見えるトウカイテイオーに対して、「あなた、どこにそんな力を秘めていたの」と、改めて驚嘆しました。

有馬記念では田原成貴騎手にスイッチして11着。その後またもや骨折、休養。結果的にラストランとなる翌年の有馬記念3日前、「有馬記念フェスティバル」というイベントで田原騎手にインタビューする機会がありました。「トウカイテイオーが真っ先にゴールに飛び込む時はどんな時でしょうか?」という問いに対して、田原騎手は「中央競馬史上のすべての常識を覆す時です」と回答。私が「ぜひ、覆して欲しいですね!」と言うと、会場からは大きな拍手が沸き起こりました。多くのファンにとって、トウカイテイオー復活は一つの夢になっていたのです。

私も、イベントでの田原騎手のその言葉で心が決まり、トウカイテイオーに常識を覆して欲しいと、新聞の予想欄で本命にしました。大勢いる競馬メディア関係者で、トウカイテイオーを本

命にしたのはほんの数名。周囲には「夢見る夢子でなければ打てない印だね」と言われましたが、トウカイテイオーに1年振りというこれまでで最大とも思える苦難に打ち勝ってほしい、そんな祈りにも近い気持ちでした。叶わない夢かもしれないけど、やっぱりこんなに強かったんだというシーンが見たいのだ、と。

そして最後の直線、トウカイテイオーが勢いよく伸びてくる。私は「ほんとうに勝てるのでは！」と心臓が飛び跳ねました。そして先頭を行く岡部騎手騎乗のビワハヤヒデを抜きゴールを目指す姿に「ああ、勝った！」と胸がいっぱいに。それは、多くのファンの夢が叶った瞬間でもありました。

レース後、田原騎手に改めてお話を伺いました。

「能力的には上位でも、勝つことは常識的には考えられないことでした。ですが、返し馬の最初の4完歩ほどで以前のリズミカルな動きを取り戻していると感じ、1年振りに競走する馬という意識を捨て、1年間順調に使い込んできた一流馬とコンビを組んでレースをするのだと、気持ちを切り替えました。少しでも気弱な気持ちを持ってしまったことをトウカイテイオーに詫び、しっかり勝つ、という意識でスタートを迎えました」

そしてゴール板を過ぎてからは、「二人だけの世界に入ってしまった。16万人のあの大歓声すら聞こえなかったくらい心地よい世界だった」そうです。多くの大レースを制してきた名手にとっ

ても、涙するほど格別で特別な勝利だったのでしょう。

トウカイテイオーは闘うということの威厳を教えてくれました。

6代母は日本競馬史上初めて牝馬として日本ダービーを制した名牝ヒサトモ。彼女の産駒の中でたった1頭の娘から細い糸でその血を繋いで生まれたトウカイテイオー。両親から受け継ぐドラマチックな要素が、独特な威厳をかもし出しているのかもしれません。

種牡馬入りしてから様子を見に行くと、トウカイテイオー専用のパドックエリアの内側一周がぐるりと掘られていました。スタッフの方に伺うと、それは「毎日決まった時間に同じところを歩いているためにできた溝で、自分の体型をコントロールしているようです」との説明。少女漫画的な表現を使えば、〝いつまでも王子様でいてくれる、誇り高きスタイリッシュな馬〟なのだなと思いました。

確かに、種牡馬になってからも引き締まった馬体で素敵でしたが、実はその裏で、努力を重ねていたんですね。自らを律し続けている姿に「自分はかっこよくなければ…」という、トウカイテイオーの心の声が聞こえるような気がしました。

最期まで、ファンに夢を届け続けてくれました。

今でも私にとってのベストルッキングホースは、トウカイテイオーです。

（構成・緒方きしん）

新馬・オープン戦&重賞レース

偉大な七冠馬の父の後を追って、
飛ぶように、弾むように走った。
圧勝劇と、自らの脚を傷つけるほどの激走と

1頭だけ別次元――多くのファンが二冠を確信した皐月賞の勝利。

1990年12月1日 中京
芝左 1800m 晴 不良

3歳新馬

皇帝から帝王へ 将来を見据えた一戦ながら見せた完勝劇

新馬戦には多彩な距離、コースがある中で、中京競馬場芝1800mの新馬戦が選ばれたのは、トウカイテイオーにクラシック、ひいては日本ダービーへの布石として、左回りの中距離レースを経験させるため、松元省一調教師の企図したレースプランであったという。

デビューするすべての馬たちにそれぞれの期待や願いが込められるのは言うまでもないが、「皇帝」シンボリルドルフの息子トウカイテイオーには、「帝王」の名にふさわしい活躍が期待され、それは目の前の1戦よりも先の未来まで見据えた壮大なものであった。

当日の正午前、中京競馬場は晴れていたが、11月末に数日間雨が続いた影響で、芝コースの馬場コンディションは不良でレースが行われた。

13頭立ての2番枠からスタートを切ったトウカイテイオーは、外枠から出た馬たちが先行争いに殺到したため、後方5番手から1コーナーに入った。冬を迎えた芝コースは蹄跡が残る荒れた馬場であったが、軽快なフットワークは乱れることなく、インコースをロスなく回

り、向正面では馬群のすぐ後ろに追いついた。鞍上の安田隆行騎手は、3コーナー手前で他の人馬が仕掛け始めるのを見て、トウカイテイオーと共に仕掛けて先行馬群に加わった。

トウカイテイオーの前には6頭が走っていたが、コーナーでの走りは、まるでトウカイテイオー自身が勝ち筋を理解しているかのように見えた。まずは3コーナーで内から4頭を交わすと、4コーナーでは逃げ粘るケイワンフラッグ、馬群から抜け出して先頭を目指したカシマトウショウの2頭の外から並びかけて直線に入った。安田騎手がトウカイテイオーの首を押してゴーサインを送ると、後続との差を広げ、外を回って追ってきた2着のカラーガードに4馬身の着差をつけて勝利した。その間、ゴールまで一度も鞭は使われなかった。

余談ではあるが、1991年にトウカイテイオーが皐月賞・日本ダービーを制覇したクラシック以降、9月から年末までの秋競馬で初出走を迎えた競走馬が1頭もクラシックを制覇しなかった年は、2022年クラシック終了までの32年間で一度も無い。

松元調教師の描いたプランが間違っていなかったことは、トウカイテイオー自身の活躍だけに留まらず、その後の競馬史を彩った競走馬たちによっても証明されたのではないか。

トウカイテイオーの新馬戦での鮮やかな勝利は、伝説の1ページ目にふさわしい内容であることは言うまでもない。それと同時に、陣営、そしてファンの期待や願いに応えるために駆け抜けた波乱万丈の競走馬生への第一歩を踏み出した、と言うべきだろう。　**（松崎直人）**

1着	**トウカイテイオー**	**安田隆行**	01:52.9
2着	**カラーガード**	**内山正博**	4
3着	**カシマトウショウ**	**本田優**	1.1/2

第二部

同時代ライバルと一族の名馬たち

無敗テイオーを豪脚でねじ伏せた
最強の芦毛馬メジロマックイーンから、
ともに戦った個性派揃いのライバルまで

「世紀の対決」でテイオーを破った名ステイヤー、メジロマックイーン。

同時代ライバル

メジロマックイーン

長距離界の絶対王者
二人の名手の駆け引きが光った天皇賞・春

ＧＩレースで「ファンを二分するような世紀の対決！」を観ることはなかなかできない。天下分け目の決戦と言われ、２頭のスーパーホースが激突したレースが、１９９２年春に実施された。決戦場所は京都競馬場、レースは天皇賞（春）。主演の２頭は、史上最強ステイヤーと無敗のダービー馬。勝った方が３つ目のＧＩタイトルを手にすることとなる一戦。

メジロマックイーンとトウカイテイオーが激突した天皇賞（春）は、長く語れる要素がぎっしり詰まった、３分20秒０のドラマだった。

昨年に続き、史上初の天皇賞（春）連覇を目指すメジロマックイーンは、３０００ｍ級長距離で、圧倒的な強さを見せていた。菊花賞、天皇賞（春）、阪神大賞典（２勝）を勝っており、この距離でメジロマックイーンに勝てるライバルは登場しないと言われていた。昨年秋の「蹉跌（さてつ）」を挽回する意味でも、ここは負けるわけにはいかない一戦だった。

もう一方の主演男優、トウカイテイオーは無敗で皐月賞、日本ダービーを制覇した５歳（現

4歳）最強馬。レース後骨折が判明し、10ヶ月休養を挟んだ仕切り直しの産経大阪杯（当時GⅡ）で、危なげない勝利を経て世紀の決戦に臨んできた。

メジロマックイーンは菊花賞優勝後、ここに至るまで8戦連続で1番人気。9戦目となるこの天皇賞（春）で、トウカイテイオーに1番人気を譲ることとなる。絶対王者として君臨している距離のレースで屈辱の2番人気は、メジロマックイーンと鞍上の武豊騎手の闘志を掻き立てたに違いない。

ゲートが開くと、メジロマックイーンは自分のレースに徹した。先導するメジロパーマーを目標に先頭集団のすぐ後ろに付ける。トウカイテイオーがすぐ後ろでマークするが、武騎手の視界にはトウカイテイオーの姿は入っていない。不利を被らない外目のコースを悠然と進み、2周目の3コーナーでメジロパーマーと並んで先頭。メジロマックイーンが動けばトウカイテイオーも追いかける。「世紀の対決」は坂を下り、4コーナーへ舞台を移す。

勝負はあっけなく終了した。直線半ばで後続を突き放すメジロマックイーンに、追従する馬はいない。トウカイテイオーを置き去りにした最強の芦毛馬は、この決戦を制した。

「この距離のタイトルは誰にも渡さない！」

メジロマックイーンと武騎手のプライドと意地が、天皇賞（春）連覇を成し遂げたと言えよう。

（夏目伊知郎）

父 メジロティターン
母 メジロオーロラ
母の父 リマンド

戦績 [12-6-1-2] 菊花賞 天皇賞・春（2勝） 宝塚記念 阪神大賞典（2勝） 京都大賞典（2勝） 産経大阪杯

距離適性 中〜長距離
脚質 先行

同時代ライバル

ビワハヤヒデ

ラストチャンスで制した菊花賞 忘れられぬテイオーとの名勝負

朝日杯3歳Sでは、外から馬体を併せてきたエルウェーウィンに差されハナ差2着。

続く共同通信杯4歳Sでは、前を行くマイネルリマークにアタマ差届かず2着。

「ハナ差クビ差は時の運」と言われる通り、どの馬が勝つかは騎乗者すら分かっていない。レースVTRを見ても、鞍上の岸滋彦騎手は完璧な競馬をしている。しかし、ビワハヤヒデの馬主サイドは、浜田光正調教師に騎手の交代を要請した。応じた浜田師は岡部幸雄騎手で若葉Sを勝利。万全の態勢で迎えた皐月賞でビワハヤヒデは3番手からレースを進めたが、ナリタタイシンの直線一気に競り負けて2着。「勝った」と思った次の瞬間、武豊騎手の仕掛けに屈してしまい、摑みかけた栄光はするりと逃げていった。続く日本ダービーでも、連続騎乗の岡部騎手はほぼ完璧な騎乗をしたが、最短ルートを走ったウイニングチケットに半馬身届かず2着。レース前から走行ルートをイメージしていた柴田政人騎手の作戦勝ちにも思える。対してビワハヤヒデは4コーナー手前でバテたドージマムテキを避けるというロスで

追い出すタイミングが遅れてしまった。

ひとことで言えば、ビワハヤヒデには運がなかった。新馬戦から日本ダービーまでの8戦すべてで連対をキープするも、GⅠ3戦はすべて2着。不運が重なっても、嘆かずに堪えていれば、いつしか幸運となるのが運勢である。不運に耐えたビワハヤヒデ陣営に幸運が訪れたのは4歳（現3歳）秋。菊花賞では2番手からレースを進めて2着以下を5馬身突き放した。

グレード制導入後、クラシック三冠をすべて連対した馬は、三冠馬以外ではミホノブルボン、エアシャカール、そしてビワハヤヒデの3頭のみだ。

ビワハヤヒデは秋3戦目に有馬記念を選んだ。14頭中8頭がGⅠ馬という豪華メンバーで古馬とは初対戦。1番人気に支持された同馬は道中で4番手を進む。4コーナー手前で早くも先頭に立つと大歓声が上がった。「勝った！」と思った次の瞬間、外から迫ってきたトウカイテイオーに交わされ2着。このレースの1週間後、朝日杯を制した半弟のナリタブライアンが最優秀3歳牡馬に選ばれた。三冠すべて連対と安定した内容で年度代表馬に選出されたビワハヤヒデは、前年の鬱憤を晴らすかのように春の天皇賞と宝塚記念を連勝。秋初戦のオールカマーも勝利。半弟のナリタブライアンが三冠を制する1週間前、秋の天皇賞に出走するも、16戦目で初めて連対を外した。レース後に屈腱炎の発症が判明して引退。GⅠ5勝を挙げたブライアンとのGⅠ合計勝利数8は、兄弟馬の記録として3位である。（後藤豊）

父 シャルード
母 パシフィカス
母の父 Northern Dancer

戦績 [10-5-0-1] 菊花賞　天皇賞・春　宝塚記念
デイリー杯3歳S　神戸新聞杯
京都記念　オールカマー

距離適性 中〜長距離
脚質 先行

同時代ライバル

ナイスネイチャ

多くのファンから愛された名馬 945日ぶりの勝利は多くの感動を巻き起こす

時に、拍手が自然と沸き起こるレースに、めぐり合えることがある。

古くはサイレンススズカの1998年金鯱賞、2000年目黒記念のステイゴールド、あるいはアーモンドアイが制した20年のジャパンCなど。それぞれに意味は違えども、無心で拍手を送りたくなる、そんなレースだった。

ナイスネイチャが制した94年高松宮杯もまた、温かな拍手に包まれたレースだった。

空梅雨も明けそうな、7月10日。前年のダービー馬、ウイニングチケットの復帰戦として注目を集めた中京のGⅡ。4コーナーで一団となった馬群の外目から、力強く抜け出してきたピンクの帽子。「ナイスネイチャがやってきた」の実況は、945日ぶりの勝利へのエールでもあった。

トウカイテイオーと同世代。骨膜炎を患ったこともあり、春のクラシックには縁がなかったが、夏から本格化して小倉記念、京都新聞杯、鳴尾記念と4歳（現3歳）時だけで重賞を3勝と、将来を嘱望されるのに十分な戦績を上げた。しかし、その鳴尾記念の勝利からが長

かった。

有馬記念3年連続3着が象徴的なように、どんなレースでも相手なりに走りながらも、勝ち切れない。どんな相手、展開、馬場でも堅実に伸びてくる末脚は、じりじりとしか伸びないもどかしさとの鏡合わせでもあった。

しかし、この日のナイスネイチャは違った。主戦・松永昌博騎手とともに、改修前の中京の短い直線を気持ちよさそうに伸びた。2年7ヶ月ぶりに先頭でゴールを駆け抜けたナイスネイチャに、場内から大きな拍手が送られた。

いかに、ナイスネイチャがファンに愛されていたかを、改めて示したシーンだった。

GⅠにはついに手が届かず、トウカイテイオーに実績では譲る。しかし、骨膜炎や骨折などの怪我もありながらも、41戦をタフに走り抜けたナイスネイチャ。どのレースでも懸命に末脚を伸ばすその姿は、多くのファンの心を惹きつけてやまなかった。その一つ一つの走りの積み重ねは、引退時にはトウカイテイオーを超える生涯獲得賞金となっていた。

人は、誰もが羨むような天賦の才に惹かれ、その才に称賛を送る。けれども、それと同じくらいに、あるいはそれ以上に、ひたむきに挑戦する姿が報われることを観たいと願う。

だからこそ、あの高松宮杯から30年近くの時を経たいまもなお、ナイスネイチャは多くのファンに愛されてやまないのだろう。

（大嵜直人）

父 ナイスダンサー
母 ウラカワミユキ
母の父 ハビトニー

戦績 [7-6-8-20] 京都新聞杯　鳴尾記念　高松宮杯　小倉記念
距離適性 中～長距離
脚質 差し

一族の名馬たち

無敗三冠を達成した皇帝シンボリルドルフ、
テイオーが遺した3頭のGⅠ勝利産駒など
競馬史に足跡を刻んだ一族の名馬たち

有馬記念を連覇、史上初のGI7勝を挙げたテイオーの父シンボリルドルフ（写真は1984年）。

一族の名馬

シンボリルドルフ

無敗三冠&GⅠ7勝 名馬が教えてくれた生き方

「馬づくりはいくら計画しても思い通りにはできない」――シンボリ牧場の経営者だった和田共弘氏の言葉である。１０００頭以上の競走馬を生産した和田氏の最高傑作こそ、無敗三冠を達成したシンボリルドルフ。後にトウカイテイオーの父となった、日本競馬史上最高と言っても差し支えない名馬である。

同馬を初めて目にしたのは、１９８４年の皐月賞だった。パドックで目にした馬体は堂々としている。前走の弥生賞で破ったビゼンニシキ（２番人気）も美しかったが、シンボリルドルフの立ち振る舞いにはオーラを感じた。

スタート後、３番手につけると、４コーナー手前で自然と先頭に躍り出た。外からビゼンニシキが迫るも、鞍上の岡部幸雄騎手がポン、と右鞭を入れると自然と抜け出す。余力すら感じる圧勝だった。

続く日本ダービーでは、先頭馬から８番手の中団を進み、ライバルのビゼンニシキよりワ

ンテンポ遅く追い出した。直線では一完歩ごとに差を開き、2着以下を1馬身以上突き放す。「モノが違う」と感じてしまった。

秋初戦のセントライト記念で3馬身差の楽勝を遂げると、続く菊花賞では中団やや後ろからレースを進める。3コーナー手前で各馬が追い出しを始めるも、余裕ある走りを見せるパートナーに岡部騎手は実に冷静な騎乗をしている。直線で追い出すと、瞬く間に前を行くニシノライデンを捉える。日本競馬史上初の無敗三冠馬は、薄曇りの中、ライトに照らされたゴールを先頭で駆け抜けた。

レース後の表彰式では、岡部騎手が指を3本立てた。無敗三冠馬への愛情や敬意を示したように感じた。

ルドルフのレース内容を言葉で示すと「優等生」。前年に三冠馬となったミスターシービーは後方一気の追い込み馬で、レース内容は破天荒。ファンをハラハラさせる三冠馬だったが、ルドルフのレースを見ていると、危険な雰囲気などまるで感じない。

私事で恐縮だが、当時高卒の新入社員だった私は、同期のライバルSに激しい嫉妬を感じていた。彼は我が道を行くタイプで、他人へ上から目線で接している。陰口を言われながら営業成績は私よりはるかに高い。「Sに勝ちたい」と燃えた私は営業手法を盗んだ。そんなSがジャパンCの直前に「ルドルフで堅いだろ」と言ってきた。当時の私はSの意見に耳を傾

第三部 トウカイテイオーを語る

優雅な馬体に加えてハンサムフェイス。「帝王」と称された気品ある外見だ。

馬体・血統・気性・脚質・走法

あの気高さや才能はどこから来たのか？
テイオーが父や母父から受け継いだ
人智を超越したものに迫る馬体論他

馬体

テイオーの走りの根源である繋と関節部分の柔らかさの秘密とは？

「ROUNDERS」編集長　治郎丸敬之

トウカイテイオーの馬体は至ってシンプルである。シュッとした流星を伴うハンサムな顔立ち、澄んだ瞳、首差しの伸びから手肢の長さ、前後軀のバランスの良さなど、どのパーツを取り上げても水準以上であることは間違いない。ただ特筆すべき馬体かというとそうではない。460～470キロ台の馬体重は、現代ではやや小柄な部類に入るが、当時においては標準的な馬体の大きさであった。特別に大きくも小さくもない、平均点の高いバランスの取れた好馬体、というのがトウカイテイオーの馬体評である。

それではなぜトウカイテイオーはここまでの名馬になれたのか。私の見解としては、父シンボリルドルフ、さらに言うとシンボリルドルフの母の父スピードシンボリから人智を超越した気高さや精神性を受け継いでいたからである。もう少し具体的に言うと、サラブレッドの本能としての他馬よりも速く走って、少しでも前に出るという気持ちの強さやプライドの高さということ。だから彼らは肉体の限界を超えて走るのであって、馬体からだけでは推し

測れない強さを持っているのだ。

トウカイテイオーがトウカイテイオーたるべき馬体の特徴を挙げるとすれば、それは繋（つなぎ）であろう。繋とは球節と蹄の間にある関節（サスペンション）にあたる部分のこと。教科書的に言うと、繋に関してはその長さと地面に対する角度を見る。大きく分けて、寝すぎた繋と立ちすぎた繋、正しい傾きの繋がある。長い繋は傾斜も大きく、普通に歩いていても、球節が深く沈むため、弾力のある柔軟な感じを受ける。

トウカイテイオーは繋が長く、弾むような歩様の馬の代表例としてよく挙げられる。当時の競馬ファンは、テイオーウォークとも呼ばれたその弾むような歩き方が印象に残っているのではないだろうか。トウカイテイオーの弾むような歩き方は、繋が柔らかくて強いこと、さらに繋が長くて球節が深く沈み込むからこその独特さであったと思う。

柔らかさと強さを両立している繋は理想である。柔らかいけど弱かったり、強いけど硬い馬はたくさんいるが、サスペンション部分が柔らかくて強い馬は意外と少ない。サスペンション部分の柔らかさや強さに関しては、馬体を外から見ても分かりにくく、実際に馬の背に跨ってみて初めて感じることができるものだ。おそらくトウカイテイオーは繋だけではなく、馬体全体のあらゆる関節部分が柔らかくて強く、曲がった分だけ反発するバネのようであったのではないかと想像する。特に若駒の頃の皐月賞や日本ダービーの走りを観ると、1頭だ

け違う生き物が走っていると思えるほど、跳ねるようにして走っていた。

ところが、繋の柔らかさや長さには負の側面もある。これも教科書的には、長くて寝すぎた繋は疲労しやすく、屈腱に大きな負荷がかかるとされている。つまり、歩様の美しさはトウカイテイオーの美点の一つではあるが、欠点でもあったということだ。その証拠に、トウカイテイオーは日本ダービーを勝った直後に左第3足根骨骨折を負い、長い休養を強いられた。古馬になって、産経大阪杯で復帰を遂げたと思いきや、次走の天皇賞（春）はメジロマックイーンに惨敗を喫し、レース10日後には右前脚の剝離骨折が判明した。その後、ジャパンCと翌年の有馬記念でも不死鳥のごとく復活の勝利を飾り、計三度の骨折を乗り越え、競馬ファンに感動を与え続けたトウカイテイオーだが、この馬の強さと同居していた脚元の不安の根源は長くて柔らかい繋にあったと思う。

もちろん、短くて立ちすぎた繋も感心しない。蹄が着地するたびに、反動がダイレクトに球節を突き上げることになるため、球節を傷めてしまうからだ。トウカイテイオーのそれとは真逆で、歩様にも全く弾力が感じられず、硬い歩き方や走り方になるのである。繋に関して言えば、長くて寝すぎてもいけないし、短くて立ちすぎてもいけない、平均的な長さと角度の繋がもっとも良い。これは走る・走らないというよりは、脚が丈夫な馬を選ぶコツだと考えてもらっても良い。

それにしても、トウカイテイオーの血がここまでつながらなかったのは不思議である。例えばメジロマックイーンが母の父として、オルフェーヴルやゴールドシップ、タイセイレジェンドを通して現代競馬に影響を与えているのに対し、トウカイテイオーの姿はほとんどどこにも見えなくなってしまった。気高さや精神性の高さは仕方ないとしても、繋をはじめとした関節部分の柔らかさと強さは産駒たちに伝わり難いものなのだろう。馬体のサイズや骨格、筋肉の質や量は遺伝しやすいのに対し、部品と部品をつなぎ合わせて動かす動的な部分は繊細なのである。いつかトウカイテイオーに恩返しをしたいと思ってやってきたが、私にできるのはこうして語ることであり、トウカイテイオーらしさが伝わった馬体の馬が登場することを最後まであきらめずに待つことぐらいか。

トウカイテイオー

第四部

トウカイテイオーの記憶

グッドルッキングホースとは何か？
最強二冠馬、坂路調教のパイオニアなど、
テイオーを特徴づけた個性を振り返る

日本ダービー勝利での口取り。鞍上・安田隆行騎手のVサイン＝二冠達成も印象的だ。

記憶 1

グッドルッキングホースは時代とともに

テイオーの別名となった「美しき姿」と テイオー以降の「グッドルッキング」なスターたち

グッドルッキングホース――文字通り、美しく見える馬である。トウカイテイオーの時代に初めて耳にした言葉であり、私もテイオーの馬体に魅了された一人だ。

パドックでトウカイテイオーを目にするたびに、オーラを感じた。30年が経過した今も脳裏に残っているのは「歩様」だ。ほかの競走馬と異なり、テイオーの歩様に柔らかさを感じた。繋が柔らかいため後肢の踏み込みが深いのだ。一歩ごとの幅は、何千頭も見てきた中でもっとも長かった。

加えてハンサムな顔立ちだった。「圧倒的なイケメン」と称する人もいるほど、目と、細長い馬相に美しさを感じてしまう。

ほかの馬には見られない、トウカイテイオーの特徴だった。

競馬評論家の故・大川慶次郎氏は、「机の上で判断できないのが良駿の鑑定です。自分なりの寸法を持つことが大事。そのためには、できる限り多くの馬を見ること」と語っていた。

この言葉に感銘を受けた私は、グッドルッキングホースを探す楽しさを競馬に見出した。

馬体の好みは十人十色である。私にとっての「グッドルッキングホース」とは「パドックで目にしたインパクト」だ。

トウカイテイオーの時代は、サンデーサイレンスの仔が競馬界を席巻する直前だった。サンデー系の競走馬が日本競馬の中心を担うようになって四半世紀が経過した。時間がある限りパドックを見てきた私が、インターネットで久しぶりに目にしたトウカイテイオーのパドック映像を見ると、「あれ？」という感覚に陥った。

懐かしさは感じるが、当時目にしたインパクトは感じなかった。サンデー系が日本競馬の中心となり、私個人の「グッドルッキング」に対する見方も、時を経て自然と変わってしまったようだ。

さて、テイオー以降、インパクトを感じたＧＩ馬。その筆頭はウオッカだ。牝馬とはどこかしら「女の子っぽさ」を感じさせるが、ウオッカは例外だった。

牡馬かと思える堂々とした立ち姿に加え、漆黒の馬体＋大きな歩様。東京の直線を駆け抜ける走りはまさに「男勝りで筋肉質な美人」。グッドルッキングならぬグッドビューティフルホースだ。

日本競馬最高の1頭と言って差し支えないディープインパクトは、私の中でグッドルッキ

ングホースにはあてはまらない。テイオーやウオッカと比べ、馬体にインパクトを感じさせない。もっといえば、サンデー系の中でも個性的な感じがする。同じサンデー直仔のサイレンススズカにも言えるのだが、この2頭は後肢が真っすぐで長く見え、パドックでの踏み込みも深かった。2頭とも軽量だったのも共通点だ。

ディープインパクトが世に送った馬のうち、もっとも美しさを感じた馬がサトノダイヤモンドだ。

菊花賞を勝った際のパドックは1頭だけオーラが出ていた。ディープインパクトは軽量馬だったが、サトノダイヤモンドは５００キロ前後。父以上に均整の取れたステイヤーかもしれないと感じた。

逆に、ディープ産駒のマイラーとして脳裏に残っている馬がダノンプレミアム。ＧＩ９勝を挙げたアーモンドアイに安田記念と秋の天皇賞で敗れたが、馬体のインパクトはアーモンドアイよりもダノンプレミアムのほうが強かった。

ここまでは馬体について触れてきたが、馬の顔についても記しておこう。

競馬界の中で、もっとも多くの馬を目にしてきたであろう、大川慶次郎氏は「馬相」について次のように語っている。

「馬を見る上で、もう一つ忘れてはならないことがあります。

顔です。これは肝要！

昔の馬喰さんはよく、『顔が物語る』と言ったものでしたが、これは今でもいえること。馬相がいい馬のほうが利口で、走るものなのです。

分かりやすく説明しましょう。

競走馬の中には、調教をやってもやっても、寝ワラまで食ってしまう馬がいるんですね。もともと馬という動物には満腹感がないためそうなってしまうのですが、利口な馬は、それをセーブできるのです。つまり、レースが近付くとそれを察知して、自分からカイバをコントロールする…。

そういう物覚えの良さ、競走馬としての自覚があるかどうかを見るのが、顔なんです」

こう語った大川氏は、当時「品のいい顔つきをしている馬」として、ホワイトストーンを挙げている。仮に大川氏が存命だったら、現代競馬でどの馬を挙げるだろうか。

ここまで、超私感的に「グッドルッキングホース」を挙げてきたが、馬の見方における物差しはそれこそ千差万別だ。

パドックでの馬体や馬相などでインパクトを感じた馬は、自身の競馬史にとって思い出深い馬となる。

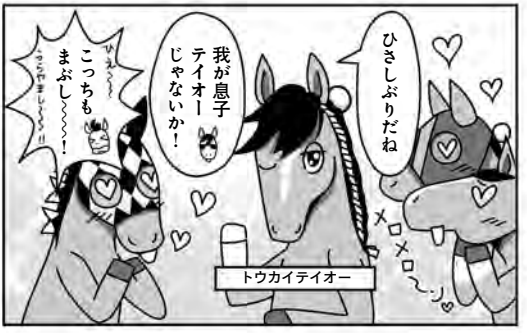
あなたにとってのグッドルッキングホースとは、どの馬だろうか。

（小川隆行）

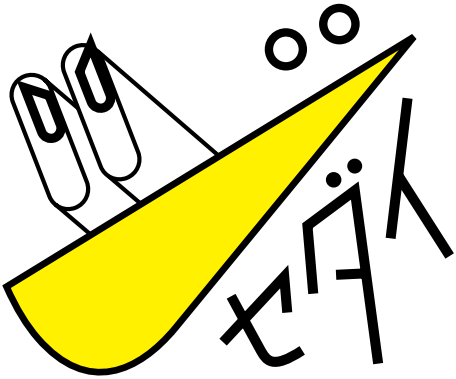
1993年
有馬記念

グッドルッキングホース物語
テイオー君とハヤヒデ君

漫画 UMANIACひい



そう…俺の名は
トウカイテイオー
競馬史に残る
グッドルッキング
ホースだ
自分で言うのも
なんだが…
テイオー――様――!!
キャー
キャー
帝王
ベガ・エルカーサリバー・ヌエボトウショウ
鉄の女も
この通りだ
イイ男…
ぐぎぎ
マジか…
イクノディクタス
くっそぉ…
俺だって
負けて
らんねぇ…
プル
プル
よーし!!
今から
特訓だ!!
ゴオオオ
うおぉおおお!!
イケメンクリニック
当ビル 4F
ドドドドド
そっちかよ



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!